HASHIMOTO KENJI
橋元 賢次

柔軟性の高いXMLデータベースで企業をサポート

XMLは印刷業界でも広い分野で利用されていて、XMLデータベースによる高品位の組版を行うワークフローが定着しつつある。そんなXMLデータベースを提供しているのが、株式会社サイバーテックである。同社は柔軟性のあるデータ管理システムを開発し、印刷業界においてはワンソース・マルチユースのソリューション・ビジネスを提案している、XMLデータベースではシェアナンバーワンの企業である。そんな同社の代表取締役社長の橋元賢次氏に、XMLの役割、今後の展開などについて話を伺った。デジタルパブリッシングが市場拡大していくなかで、スマートフォンや電子書籍端末等のモバイル端末を使ったデータ配信では、XMLがコアな技術として役割を担っているという。印刷・出版業界ではXML技術はますます重要になると示唆する。

XMLは再利用性が高い点で万能なフォーマットである

——1998年に会社を設立され、2001年からXMLを活用したソフトウェアやサービスを提供されるようになりましたが…。

橋元　設立当初はオープンソースのRDB（リレーショナル・データベース）でデータ管理を実現しようと、さまざまな取り組みを実施してきましたが、高い柔軟性を実現することが困難だということで、2001年よりXML技術に特化した柔らかいデータ管理システムの提供に移行しました。サイバーテックが志していることは、IT業界で大きな変革の足跡を残すことであり、そのコアとなるのはXML技術になります。

——XMLのデータフォーマットが誕生して13年ですが、かなり普及しているのでしょうか？

橋元　マイクロソフト社では「Office2007」の保存形式に、XMLベースのデータフォーマットであるOOXML（Office Open XML）に変更しました。OpenOfficeやそれをベースとしたソフトウェア製品で扱われる文書データも、XMLフォーマットであるODF（Open Document Format）で提供されていますから、XMLは文字通りデファクトスタンダードになっています。

——印刷業界でもXMLは定着しつつあるのでしょうか？

橋元　昔からのSGMLの流れがありますので、印刷の核となるフォーマットとして普及しています。XMLデータベースは、コンテンツをXML化してメタデータで管理し、製品情報と紐づけることから、製造業から普及してきた経緯があります。でも、コンテンツ管理のデータベースに相応しいという点で、データベース組版や、ワンソース・マルチユース等の分野で印刷業界でも利用されるようになってきたわけです。一般のRDBを使ってデータベース化するのは、XMLと比べてかなりハードルが高くて難しいものがあります。WordやExcelで分かるように、今日のデータベースで使用されるフォーマットはXMLが標準になっていますから、今やXMLフォーマット在りきになっているのが現状です。

——なるほど。XMLフォーマットが標準化され、浸透しているわけですね。

橋元　XMLデータベースで元データを一元化することで、Webや印刷の組版、DVD、あるいは電子書籍やスマートフォン等のモバイル端末に出力・表示できるようにしているわけです。ただし、それらに出力・表示するためには紐づけるソフトウェアが必要になります。例えば、組版であれば、InDesignのようなレイアウトソフトになります。InDesignでレイアウトしたところに、XMLのデータを流し込めばDTPが可能というわけです。とは言っても、決められたデザインに則ってデータを流し込むフォーマットに過ぎませんから、XMLがデザインを自動的に変更するようなことはできません。ですから、デザイ

Hashimoto Kenji
1973年大阪府生まれ。95年国立愛媛大学電気電子工学科卒業。同年4月沖電気工業株式会社入社。Cadence社Verilog-XLを用いたHDL（論理記述）手法によるLSI設計、およびBorland社Turbo C++を用いたLSI評価用ソフトウェア開発業務に3年間携わる。1998年9月 沖電気工業株式会社退社。サイバーテック有限会社設立。代表取締役に就任。同社では、2001年4月XML／XML DBの受託開発を開始。2005年8月XMLデータベース事業をソニックソフトウエア社から取得。2006年5月フィリピンセブ島に「セブ開発センター」を開設。2007年11月「NeoCoreXMS」事業を三井物産セキュアディレクション社から取得。

ンを変更する際は必ずタグ付けをして、新たなデザインを作成して、それにデータを流しこむことになります。コンテンツをXMLファイルに書き出す前に、書き出すテキストにタグ付けして、コンテンツの要素を識別するタグを作成し、テキストやページアイテムにタグ付けする作業が必要になります。

XMLデータベースで一元管理すればマルチメディア展開が容易になる

——XMLはフォーマットとしては万能ということでしょうか？

橋元　はい。再利用性が非常に高いという点で万能と言えるでしょう。例えば、XML化していないIllustratorで作成したデータを元データとして管理していますと、Illustrator上（DTP上）でしか利用できず、他のフォーマットでは利用ができません。そこで元データをXMLデータにしておけば、Illustratorにでも、あるいは他のデータでも好きなように加工して使えることができるのです。

——XMLはマニュアルや表などの定型化された組版に向いていると思うのですが…。

橋元　そうですね。定型化した組版では、XMLによる自動組版がしやすいという利点があります。マニュアルやカタログ等の組版作業で、XMLデータで管理していれば作業が効率的ですし、ひいてはコストダウンに繋がっていきます。重要なことは自動組版が行えるようにするために、XMLデータベースを構築して、印刷だけでなく、さまざまなデバイスに出力できるようなワークフローにしておくことがポイントと言えるでしょう。

——御社では、そのXMLデータベースを提供されていますが…。

橋元　はい。当社のXMLデータベースの国内シェアは約40％を占めていて、お陰さまで4年連続1位です。企業内に散在するさまざまなコンテンツのメタデータを、XMLデータベースに一元管理して、そのデータをWebに配信するニーズに応えていますが、その代表的なデータベースが「NeoCoreXMS」になります。「NeoCoreXMS」の特長は、データ量やデータ構造に依存しない高速性、全てのタグに対して自動的にインデックスを貼ること、さらにはXML形式のデータを柔軟に吸収する機能が施されている点にあります。ですから、企業情報システムで仕様変更が頻繁に発生する際に、時間とコストを大幅に削減してシステムを運用することができます。具体的なメリットとしては、元データからのコピー&ペーストによるミスを限りなくゼロにできること。人手が介在せず、システムでリアルタイムに出力できること。オペレーションコストの削減・多展開による営業機会の拡大が図れることなどが挙げられます。

——「NeoCoreXMS」は印刷業界にも導入が進んでいるとのことですが…。

橋元　そうですね。面倒なDTD、XMLスキーマの定義が不要ですし、どんなデータでも高速に格納し、検索することができますから、印刷会社さんのワークフローには適していると思います。集めたさまざまなデータソースをXMLデータにして「NeoCoreXMS」で一元管理しておけば、Webでの公開、DVD制作、紙・PDF出力、スマートフォンやipadなどのモバイル端末での配信などに活用することができます。さまざまな形で簡単に再利用することが可能です。それに印刷においては、DTPなどの印刷物制作の効率化、紙の電子化による印刷・配布・保管コストの削減化に役立ちますので、XMLデータベースにしておくとメリットが多いのです。NeoCoreXMSと連携したシステムも各パートナー企業さんから提供されていますので、それらを使って自動組版をされたり、Web to Printを構築されたりして、活用している印刷会社が増えています。

セブ島でのオフショア開発、スマートフォンビジネスと連携し市場拡大

——オフショア開発をされてらっしゃるとのことですが…。

マニュアルやカタログ等の組版作業で、XMLデータで管理していれば作業が効率的ですし、ひいてはコストダウンに繋がっていきます。

——橋元 賢次

株式会社サイバーテックのホームページ
http://www.cybertech.co.jp/

柔軟性の高いXMLデータベースで企業をサポート

PERSONS パーソンズ

HASHIMOTO KENJI 橋元 賢次

「NeoCoreXMS」のXMLデータベースによる一元管理の概略図

橋元　フィリピンのセブ島でアウトソーシングセンターを設けて、本社向けにソフトウェアプロダクツのオフショア開発をしています。また、Webや電子書籍などの各種マルチメディアコンテンツ制作をはじめ、各種ITアウトソーシングサービスを制作会社様やエンドユーザーのWeb管理部門様向けに提供しています。近隣アジア諸国と比較しても低コストですし、高い採用基準で継続的なトレーニングの下で優秀な現地スタッフを雇っていますから、国内委託と同等のクオリティで開発することができます。しかも全員英語が話せるのも利点です。また、日本人が現地に常駐していますから、国内遠隔地の業者さんと案件を進める場合と同じように、日本語でやり取りしていただくことが可能です。

今後はXMLを利用したスマートフォンのビジネスが拡大していくのでしょうか？

橋元　はい。企業内のコンテンツをスマートフォンで検索、閲覧し、顧客先で提示して活用するケースが増えていくでしょう。また、電子書籍等のコンテンツの配信やコンテンツの課金等をスマートフォンで行うシーンが増えていくことが予想され、スマートフォンがビジネスで大きな役割を担う端末になるでしょう。その際に、さまざまなコンテンツをデータベース化しておく必要があり、XMLデータベースが不可欠になってくるわけです。企業内コンテンツはじめさまざまなコンテンツをXMLデータベースで一元管理し、スマートフォンと連携させておくことで、スピーディなビジネスを展開していくことが可能になるのです。

スマートフォンの普及が、XMLデータベースのさらなる市場拡大に貢献するというわけですね。

橋元　そうです。スマートフォン・ビジネスだけで終わるとなると、印刷との関連性は薄いと思いますが、スマートフォンを入り口にしてそこから印刷の紙の出力に絡めたビジネス展開を提案しています。そのためにはまずスマートフォンから始めていくことを提唱し、次に紙へ移行していくという方法になっていくと思います。出版社では書籍の売上を増加させるためには、出版コンテンツの電子化や電子書籍ビジネスへの参入は避けて通れません。そのためには、版元である出版社内でコンテンツがすぐに再利用できる形で一元管理されている必要があります。

つまり、電子書籍化には、コンテンツデータベースの整備が必須であるということです。先ほど、「ワンソース・マルチユース」という言葉が出てきましたが、「ワンソース・マルチユース・マルチデバイス」の時代がそこまで来ていると言っても過言ではないでしょう。ですから、Webが台頭した際にWebサイトの制作にシフトした印刷会社が出現したように、スマートフォンが普及すればそれを使ったビジネスが印刷業界でも始まるでしょう。実際、先取りして始めている企業さんも出て来ています。

当社ではビジネスにおいてスマートフォンとコンテンツを連携させていくことの重要性を説くセミナーを開催しています。また、XMLデータベースのことをもっと知っていただくために、定期的にXMLのミニセミナーを開催しています。印刷関連会社さんも参加してらっしゃいますね。参加費は無料です（事前登録制）。XMLの基本的な内容を理解したい方向けのセミナーで、XMLデータベースの基礎が理解できるようになっていますし、データベース化する上での課題にもお答えしています。気軽に参加してみてください。

今後の展開については。

橋元　今日のビジネスシーンでは柔らかいデータ管理はますます重要になっています。業務効率を向上させるXMLのリーディングカンパニーとして、そして、XMLのプロフェッショナルとして企業の皆さまのビジネスイノベーションのお役に立てるように、邁進していく考えです。